

令和2年産大崎地域の 大豆作技術情報（第4号）

令和2年8月19日発行
宮城県大崎農業改良普及センター
TEL:0229-91-0726 FAX:0229-23-0910
<https://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/>

～栽培のポイント～

- 天候に留意し、干害・湿害対策を行いましょ。
- 病害虫防除を適期に行いましょ。

1 気象経過

- 最高気温は7月3半旬～6半旬までは平年を下回り、8月に入ってからは平年並みで推移したが8月3半旬は平年を上回った。最低気温は、ほぼ平年並で推移し8月2半旬以降は平年より高くなった。
- 日照時間は7月は平年を下回って推移し、8月3半旬には平年を上回った。
- 降水量は7月は平年を大幅に上回った。梅雨明けは8月2日と平年より8日遅くなった。

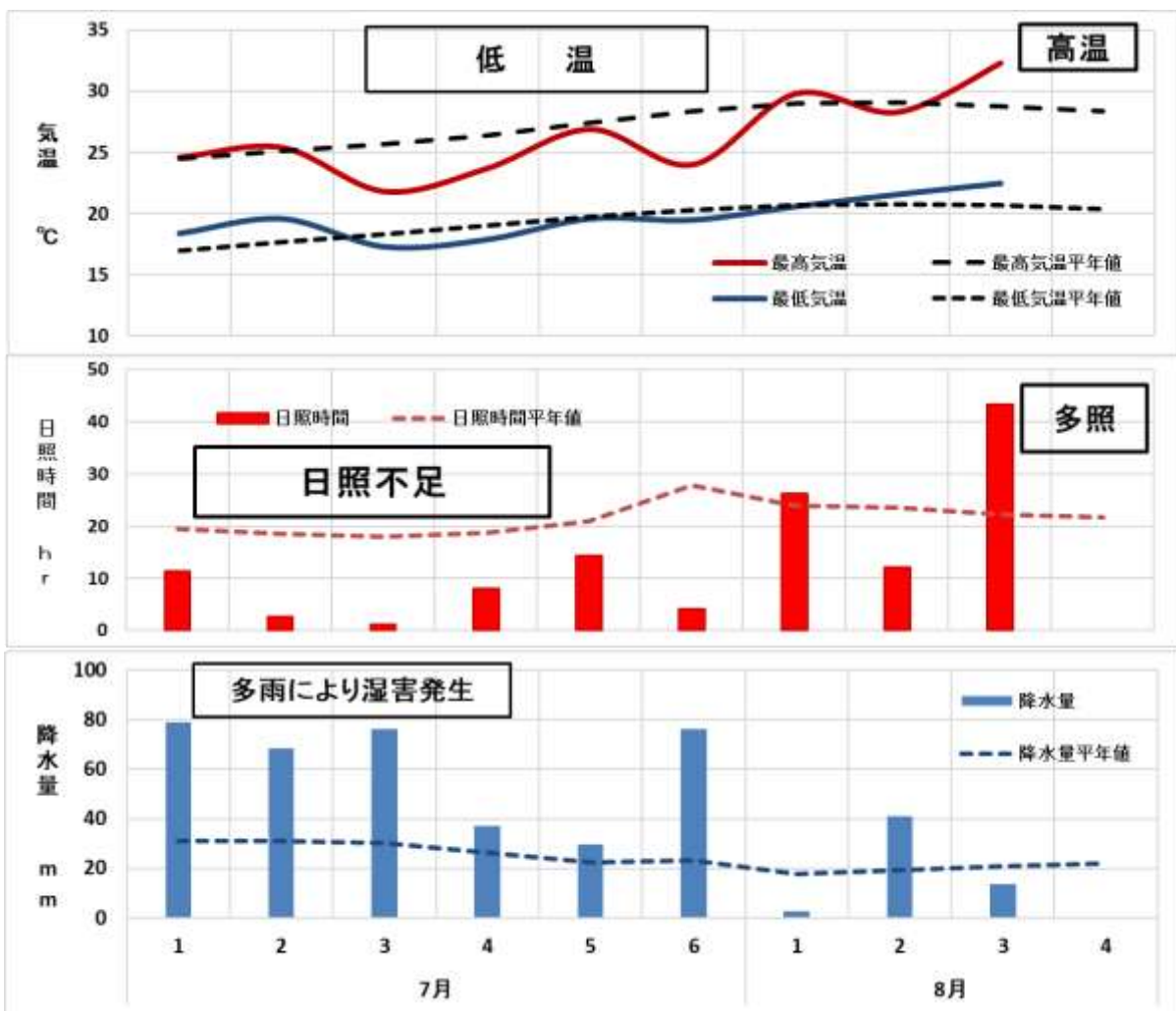


図1 7月～8月中旬の気象（点線は平年値）

2 生育概況

播種後の乾燥による出芽遅れや、梅雨入り後の長雨の影響により、7月25日調査では主茎節数や分枝数は平年を下回っていたが、8月11日の調査では、生育は回復してきており、特に分枝数はいずれのほ場も平年を上回っている。しかし、調査ほ場以外では、十分な生育の回復に至っていないほ場も散見される。

生育が遅れた影響により、開花期は平年よりも遅くなった。

地区名 品種名	区分	播種日	開花期	8月11日		
				茎長 (cm)	主茎節数 (節/本)	分枝数 (本/本)
古川 タンレイ	本年 平年差・比	6月2日 (5日遅い)	8月1日 (6日遅い)	74.8 122%	15.3 107%	3.5 107%
古川 ミヤギシ	本年 平年差・比	6月8日 (6日遅い)	8月7日 (2日遅い)	78.4 101%	15.0 96%	4.1 104%
古川 きぬさや	本年 平年差・比	6月10日 平年と同じ	8月5日 (3日遅い)	59.1 114%	12.0 100%	4.9 203%
小野田 タチナガ	本年 平年差・比	6月10日 (2日遅い)	8月2日 (平年並み)	55.6 88%	12.8 94%	3.1 123%

表1 生育調査ほの生育調査結果及び生育ステージ

※ 平年比・差は、過去5か年（平成27年～令和元年）の平均値との比較。ただし、小野田タチナガは過去4か年（平成28年～令和元年）の平均値との比較。



古川ミヤギシロメ



古川タンレイ

3 今後の栽培管理のポイント

(1) 干害・湿害対策の実施

開花期以降（7月下旬～9月上旬）は、大豆の養水分吸収が多くなる時期であり、土壤水分が不足すると落花・落莢が多くなります。

降雨がない日が続く場合は、土壤表面にしみ出す程度まで、排水溝や畦間内に通水を行いましょう。降雨が続く場合は、降雨の前後に排水溝や明きよを点検し、排水が滞らないようにしまししょう。また、水が溜まった所は溝を切り、明きよにつなげ、排水を促進しまししょう。

(2) 病害虫防除

1) 紫斑病 開花期後20～40日に防除

- 「タンレイ」は紫斑病抵抗性が“中”であり、連作ほ場や成熟期に降雨が多い場合は多発しますので、**2回防除を徹底しましょう。**
- 同一系統の薬剤を多数回散布すると耐性菌が発生する恐れがありますので、2回防除の場合は異なる系統の薬剤を使用しましょう。
- 収穫が遅くなると紫斑粒の割合が高まりますので、適期収穫に努めましょう。



写真2 紫斑病

2) マメシンクイガ 8月下旬~9月上旬に1回目,その7~10日後に2回目の防除

- 羽化した成虫やふ化直後の幼虫に対する防除が効果的です。
- 大豆を連作すると、越冬幼虫が増加し、食害の発生が多くなりますので、**連作ほ場の発生状況に注意しましょう。**



写真3 マメシンクイガ幼虫

3) フタスジヒメハムシ 8月下旬~9月上旬に防除

- 8月下旬頃までの若莢を食害することで、そこからカビが入り込み、汚粒（黒斑粒）や腐敗粒となります。作付け初年目から被害が出やすい傾向があります。



写真4 フタスジヒメハムシ成虫

4) ジャガイモヒゲナガアブラムシ 8月~9月に防除

- 8月下旬~9月上旬に急激に発生すると吸汁害に伴う早期落葉により、収量・品質に大きな被害が出ます。



写真5 ジャガイモヒゲナガアブラムシ成虫

5) カメムシ類 他の主要害虫との同時防除

- 子実を吸汁加害し、夏季の高温で発生が多くなる傾向があります。



写真6 ホソヘリカメムシ成虫

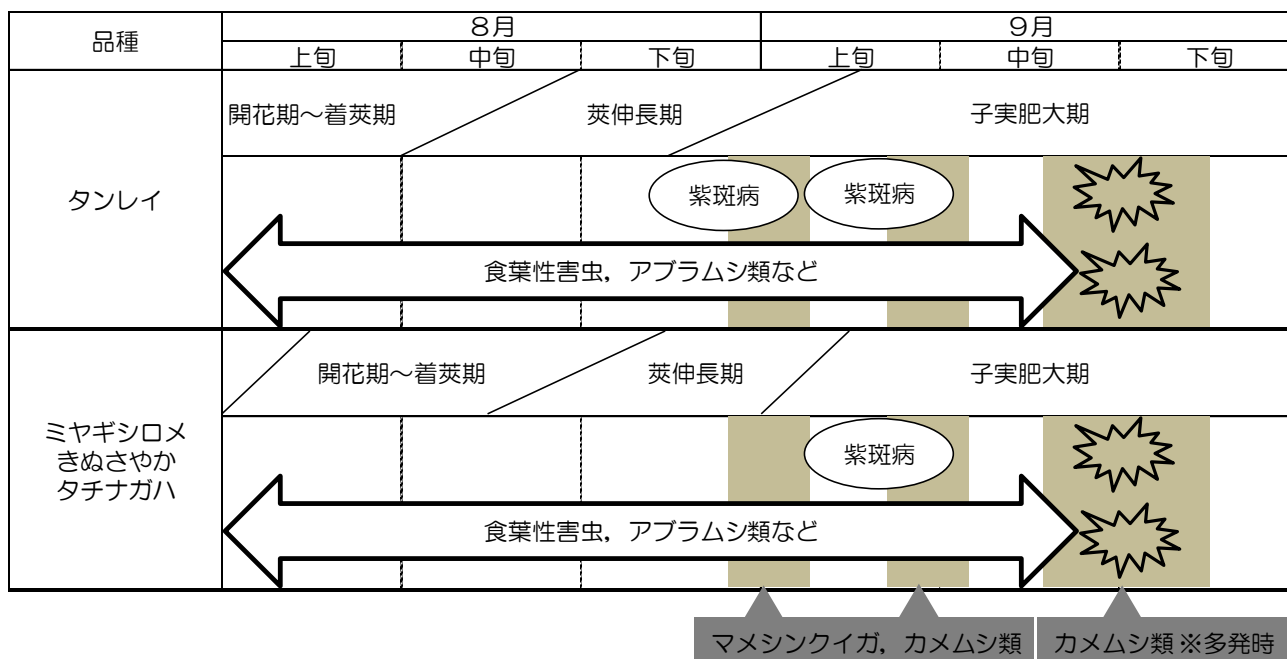


図2 病虫害の防除体系例

東北地方 1 か月予報
(8月15日から9月14日までの天候見通し)

令和2年8月13日
仙台管区气象台 発表※抜粋

<特に注意を要する事項>
東北太平洋側では、期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

		低い(少ない)	平年並	高い(多い)
【気温】	東北地方	10	20	70
【降水量】	東北太平洋側	40	40	20
【日照時間】	東北太平洋側	20	40	40

<気温経過の各階級の確率(%)>

		低い	平年並	高い
1 週 目	東北太平洋側	10	10	80
2 週 目	東北太平洋側	10	20	70
3~4週目	東北地方	20	30	50

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆**農薬危害防止運動(6月1日~8月31日)**◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

6月から8月にかけて、農作物等の病虫害が発生しやすく、農薬を使用する機会が最も多くなる時期です。農薬安全対策の不備や不注意等による事故が発生しやすくなるため、農薬使用による危害防止と環境に配慮した適正な農薬の使用を徹底しましょう。